

算命学中庸

【初年】 19回目

19回目の授業はこのページからです。

授業科目 【十干天性 じっかんてんせい】

【初年】 19回目 【十干天性】 01

男 は 陽 [+] ⇒ 精神

女 は 陰 [-] ⇒ 肉体（現実）

じっかん てんせい
十干の天性ということでは、まず「陽」と「陰」の違いを知っておいていただきたいのです。

さまざまな陰陽の分類がありますが、人間に「陰陽」を当てはめると「男は陽」「女は陰」です。

その違いは「主^{しゅ}」と「従^{じゅう}」の違いです。

一般的に「主」は、主君とか主要とかの言葉があるように〔ものごとの中心となる〕と考えていただくとよいでしょう。〔主婦という言葉がありますように、一家の主人である女性を意味する場合があります〕

一般的に「従」は、付随とか付属という言葉があるように〔ものごとの中心とはならない〕とを考えていただくとよいでしょう。

これに陰陽論が加わると、その意味合いは異なってきます。

男と女では、男のほうに主体性があると考えています。さらに「精神」と「肉体」を考えたときは、「精神は陽」「肉体は陰」になります。

精神と肉体では、精神のほうに主体性があります。

🔍 【十干天性】のまなびは、03頁 十干天性の表 を参考にします。

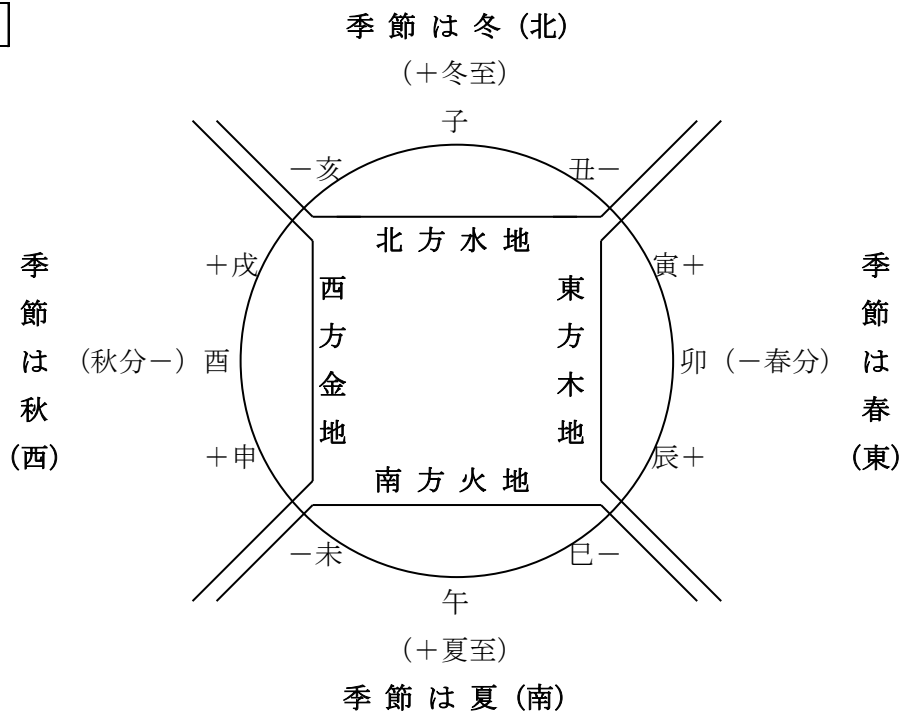
十干天性の表 と 十二支（十二支と季節の図）が記されています。

（十二支と季節の図）については、これから先の勉強でご説明します。

十干天性の表

干	陰陽／五行	自然界における役割	(気の質)	性別
甲	陽／木性	樹木・果実	(陽の気は大きい)	男性
乙	陰／木性	草花・穀物	(陰の気は小さい)	女性
丙	陽／火性	太陽・陽光	(陽の気は大きい)	男性
丁	陰／火性	月・火炎・灯火	(陰の気は小さい)	女性
戊	陽／土性	山・連山	(陽の気は大きい)	男性
己	陰／土性	平地・田畑	(陰の気は小さい)	女性
庚	陽／金性	鉱物・斧	(陽の気は大きい)	男性
辛	陰／金性	石・宝石	(陰の気は小さい)	女性
壬	陽／水性	海・湖・大河	(陽の気は大きい)	男性
癸	陰／水性	川・雨	(陰の気は小さい)	女性

十二支



☞ 人間は精神と肉体を備えています。

算命学で物事を「精神」と「肉体」に分けたときには、
肉体のほうを現実と考えます。

「肉体」は事実として、眼で見ることでもあります。

肉体に^ふ触れることもできる現実的存在です。

ゆえに、肉体を現実として考えます。

「精神」を眼で見ることにはできませんし、現実の感覚と
して^ふ触れることもできません。

ゆえに、現実的存在ではないということです。

この意味合いは、占いをするときによくつかいます。

そのときに「精神を陽」「現実を陰」として、分けて考え
ます。算命学でつかう用法です。

占うときに、「精神的な事象」と「現実的な事象」に分け
て観てゆきます。これから出てきます。

このように「陰陽」の分け方があります。とても大切で
すから、頭のなかのどこかに^{とど}留めておいてください。

☞ 算命学における、男と女の違いをご説明します。

算命学でいうところの男と女〔基本的相違〕

男性 ⇒ 精神に強い

男は陽で精神というところから、男のほうが精神を重んじる生き物です。

物の考え方はどちらかといえば、精神面を重視する考え方をするほうが多いでしょう。

「武士は食わねど高揚枝^{たかようじ}」やせがまんの^{いま}……現在は、そのような男性いますか、どうでしょう？

女性 ⇒ 現実に強い

女性は現実に強く現実的です。

女は陰で肉体というところから、女のほうが現実を重んじる生き物です。

ものの考え方もどちらかといえば、女性は生活・現実に即した考え方をすることが多いでしょう。

実生活にかかわる出来事というのは、ほとんど現実的な側面を有します。

〔たとえば〕結婚して、妻は家事をやります。

(昨今は、共働きが多いので、必ずしも妻が家事のすべてを受け持つということはないでしょうけど……)

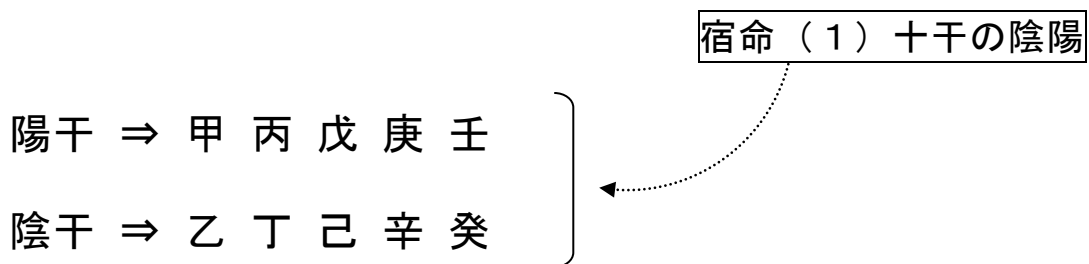
家事はどちらかといえば、現実的な仕事だとおもえます。掃除にしても、洗濯にしても、ご飯をつくるにしても、現実的な仕事です。ゆえに、現実面に強いのは女性のほうです。

本来、女性のほうが現実的な仕事は上手なはずです。

精神力を必要とする仕事は男のほうが強いはずです。

男と女の基本的な大きな違いは以上です。

「陽は精神」「陰は現実」この陰陽の違いを宿命に当てはめます。



十干を陽と陰に当てはめると、宿命(1) 十干の陰陽 のようになります。

十干を宿命に当て嵌めると、つぎのようになります。 ➡

* 2020(令和2)-2-4 宿命(2) 男子

上記の生年月日に生まれた〔男子〕として考えます。

日 干 支	月 干 支	年 干 支	
丁	戊	庚	日干の「丁火」は、陰干で自分自身です。
巳	寅	子	年干「庚金」と月干「戊土」は陽干です。

誰でも宿命の十干は「年干」「月干」「日干」と3つありますから、この人のように陰陽の干が混ざったりしますが、日干は自分自身ですから、宿命のなかで日干が陰干なのか陽干なのかを見てください。

宿命(2) 男子の「日干」は陰干です。

日干の 丁火 ていか が自分自身です。

そうしますと、〔男は精神に強い〕〔女性は現実に強い〕と
いいましたように：

日干が陽干 ⇒ 精神に強くて精神的

日干が陰干 ⇒ 現実に強くて現実的

このことを加えて考えるわけです。

この人の日干は(丁)ですから ⇒ 現実に強くて現実的
つまり男女に関係なく……宿命の日干は陰干ですから
“現実が強い”ということになります。

つぎに、男女の性別を加えるとどうなるのでしょうか。
宿命の「日干」は、陰干なので“現実が強い”といいま
した。今度はそれに男女の性別を加えます。

宿命の陰陽を加えて、男女の性別を加えて、両方で観るというこ
とになります。よろしいですか……。

そうしますと、[たとえば] この人物が女性だとすれば、
女性は現実に強いです。

宿命の「日干」も陰干ですから [とても現実が強い人]
です。このように観ます。

宿命(3) 女性

日 干 支	月 干 支	年 干 支	
(丁)	戊	庚	日干の「丁火」は陰干で自分自身です。
巳	寅	子	日干が陰干 ⇒ 現実的で現実面に強い

女性 ⇒ 現実に強い 男性 ⇒ 精神に強い

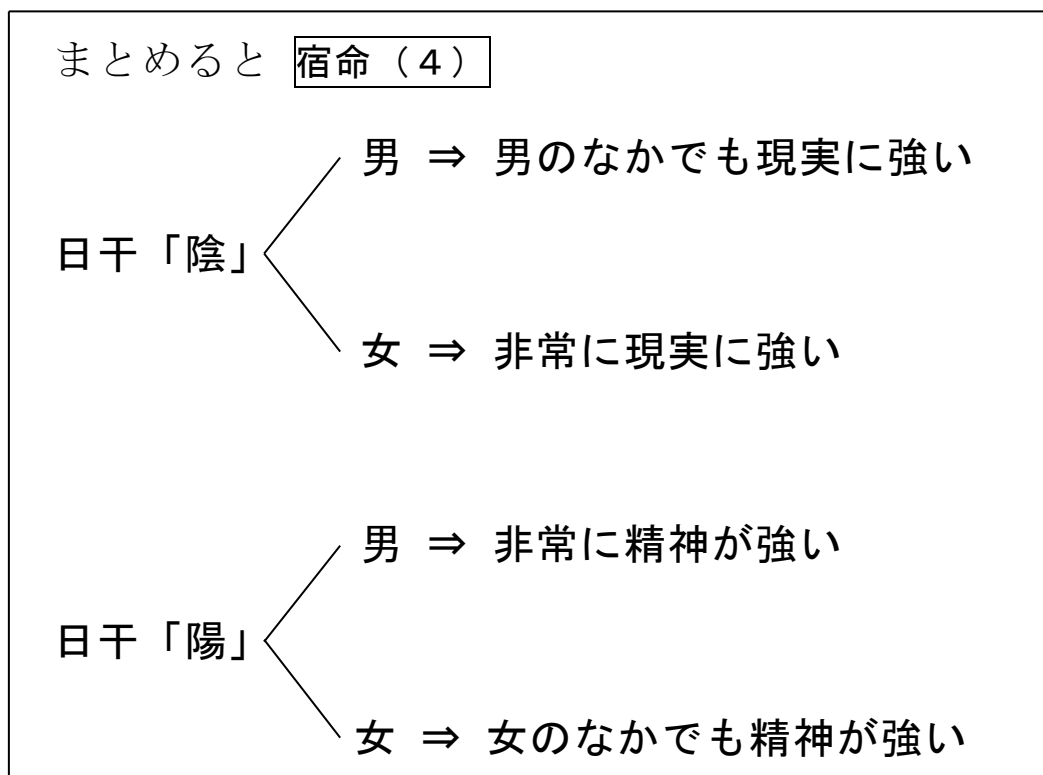
宿命の「日干」は陰干で現実に強いです。なおかつ女性
ですから、とても現実的な考え方をする人です。

そうしますと、

「多くの女性のなかでも、特に現実的な人です」という
ことになるわけです。

女性は現実に強く現実的ですが、そのなかでも精神が
強いという女性もいるわけです。

その姿も宿命で観ていくようになります。



⇒ 「男（陽）精神」「女（陰）肉体」という違いについて、
算命学はつぎのように考えています。

女は陰で、肉体は陰で、子供を生むのは女性ですから、
子供を生めば母親です。

母親（母の役目） ⇒ 子供に肉体を与える

子供に肉体を与えるのは母親の役目なわけです。

男は陽で、精神は陽で、子供を生むことはできません。

父親（父の役目） ⇒ 子供に精神を与える

妻が生んだ子供に、精神を与えるのは父親の役目である。

このように算命学は考えています。

母親が子供に肉体を与えるのであれば、父親はその子供
に精神を与えるはずだと考えているのです。

このことは、与えるだけで、終りではありませんよね。

生んだあとで、両親は子供を育てます。

子供に現実を教えるのは、基本的に母親の役目です。

そのようにも考えています。

現実面を具体的にいえば「実生活の仕方」です。

子供に現実面を教える



実生活の仕方

参考・仕方〔なすべき方法・やり方〕

〔たとえば〕朝起きて歯を磨いて、顔を洗ってということから、挨拶の仕方まで、基本的にお母さんが教えます。

それに対して、



子供に精神面を教える

主として父親の役目だというふうに考えています。

母親が現実を教える。父親が精神を教える。という方法も、直接的に〔これはこうやるのよ……〕と、具体的に教えるやり方も一つの手段ですけど、母親が^{もともと}元々しっかりした生き方をしていれば、子供はそれを見ることで、自然に現実面が備わっていくと考えています。

父親が子供に精神面を教えるということでは――、

〔たとえば〕人間はこのようにして生きるべきだとか、

男の子はこういう精神・心もちで生きて行くべきだ——
とか、そのような精神論を唱^{とな}えるのも、父親の役目とも
いえますけど、言葉でその意義を教えなくても、父親が
しっかりした生き方をしていれば、子供はその後^{うし}ろ姿を
観て、自然に精神の趣^{おもむき}を父から教わることになります。
父親は、本来の生き方に処する姿勢で、子供を導かなく
てはいけないのです。

参考・処する〔その場に身を置いて、それに応じて行動をとる〕

本来の生き方、処する道で精神を教えなくてはいけない

教える・伝えるということは、このような意味も含んで
の話だとおもってください。

口で立派なことを教えても、父親の生き方がその言葉と
全く違っていたとすれば、なんの意味もないだけでなく
子供の精神を“ねじ曲げてしまう”ことにもなるでしょ
う。人間はこうやって生きるべきだと、唇^{くち}をいくら動か
しても、実際には裏腹な行動を取る父親もいるわけです。

ダメな母親に育てられた人は ⇒ 現実面に欠点が出ます。

ダメな父親に育てられた人は ⇒ 精神面に欠点が出ます。

大きな意味として、このようにいえるかと想^{おも}います。

〔たとえば〕子供を占うのであれば、両親の過去の姿、
現在の姿、子供を育てたときの環境・状況を、宿命とは
別に知ることは大切なことです。

おなじ生年月日の人物であっても〔ダメなお母さんに育
てられた場合〕と〔立派なお母さんに育てられた場合〕
ということは有り得ます。

おなじく〔いいお父さんに育てられる場合〕とか――

〔飲んだくれのお父さん〕〔家族に暴力をふるう父親〕に
育てられる場合もあるでしょう。

☞〔ダメな母親に育てられた人は、それだけで現実面に
欠点ができる〕〔ダメ父親に育てられた人は、精神面に欠点
ができる〕という意味合い、そして、種々の事柄を鑑みて、
占う必要があるわけです。

参考・鑑みる〔過去の事例や現在の事情をよく考え合わせて判断する〕

そうしますと、母親もダメ母で、父親もダメ父だとした
ら、子供はどうなるのでしょうか……人生そのものがダメ
になる可能性が高くなります。

あるいは、さまざまな理由から、父もしくは、母がいないとなれば、子供自身に欠けた部分をもたらします。

❖ 父がいなければ「母の気」が強くなります。

母の気が強くなるということは、現実が強くなるということことです。

❖ 母がいなければ、現実面にだらしなく利己主義になる傾向があり、お金も野放図につかうとかの欠点をみせるようにもなります。

この話は——成功・不成功には関係ない。とは言い切れないのです。成功した場合には欠点が強く出ます。

⇒ 父親は物事の在り方・考え方を教える存在です。

端的に言えば「物事の善悪」などです。善悪の判断を間違えるのは、精神の欠陥がある。というふうにも観ます。

在り方を教える存在がいない——父がいないとすれば、父親の代わりとなる人がいると、その子供は精神的に……かなりの程度・だいぶん助かります。

〔たとえば〕 お兄さんとか、おじいさんとかの存在があればです。

参考・在り方〔当然こうなくてはならないという、物事の望ましい姿〕

占うときに「孤児院で育ちました」という人の場合には父も母もいないわけです。

そうしますと、占うときは「親がいないという事実です」それはその子のせいではないのですけれど、「父も母もいなくて育ちました」といったのであれば——それだけで現実と精神に欠けた部分が出てしまうのです。悲哀です。幸せにはなるのは難しい傾向にあると考えます。

なぜかといえ、その子の宿命が——どれほど良い宿命であっても、その子が孤児院で育ったという事実があれば、その子のせいではないのですが、運勢的に伸びにくいと考えています。不幸な傾向に陥りやすいといえます。

まずは「陰」と「陽」の違いを知っておいて頂きたいということで、父親と母親にも、陽と陰の違いがあり——その陽と陰に〔父親の役目〕〔母親の役目〕を当てはめて話を進めました。

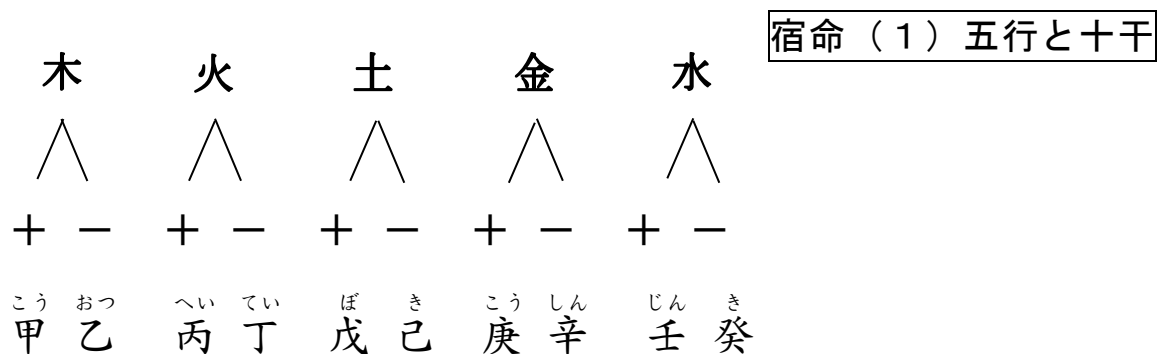
☞ つぎに、十干にも陰陽があります。 ➡

⇒ ^{じっかん}十干にも陰陽があります。

五行（木火土金水）に^{そく}則して、十干〔甲乙丙丁戊己庚辛壬癸〕の「個々の干」を、陽と陰に分けたものが、十干の陰陽になります。

このことはすでに、【初年】 7回目【十干の成立】 02において、まなびました。

〔たとえば〕五行で^{もくせい}木性とか、^{かせい}火性とか、^{すいせい}水性とか、いつてきましたが、それらにも、^{よう}陽の^{もくせい}木性と^{いん}陰の^{もくせい}木性がありました。



^{もともと}元々自然界は五行（木火土金水）に分けられると考えています。

自然界のなかで、五行に分類できないものは“無い”と考えているわけです。

それゆえに、十干も自然界の物質に置き換えて考えることが多いのです。十干 ⇒ 甲 乙 丙 丁 戊 己 庚 辛 壬 癸

「主」と「従」の違いということで、陽と陰に分けると
〔主体性のあるほうが陽〕という話をしました。

主体性があるということでは……

宿命（2）十干陰陽

＋〔陽〕 主体 ⇒ 大きい 強い 男性的

－〔陰〕 従属 ⇒ 小さい 弱い 女性的

＋〔陽〕のほうが大きいとすれば……男と女ということでは、一般的に男のほうが大きいと考えます。

木性でも、火性でも、水性でも、＋〔陽〕のほうが大きいと考えるわけです。

そして、大きいのがから強いだろうと、あるいは、男性的な質を備えているはずだとしています。

＋〔陽〕と比較して、－〔陰〕のほうが小さいとすれば陽よりも陰は弱いはず、あるいは女性的だという考え方が当て嵌まります。

〔陽〕のほうは、大きく・強くて男性的です。

〔陰〕のほうは、小さく・弱くて女性的です。

⇒ 木性

木性にも「甲」陽こうの木性と「乙」陰おつの木性があります。
両者を分けたときに、「甲木」は陽こうの木性だから、大きくて、強くて、男性的だ。それはどのような姿をしているのかを想像すると、木性に属する草木のなかでは「樹木」ではないのかと……。

甲 ⇒ 樹木

特に大木になるような樹木であれば、当て嵌あはまるのではないかと思います。

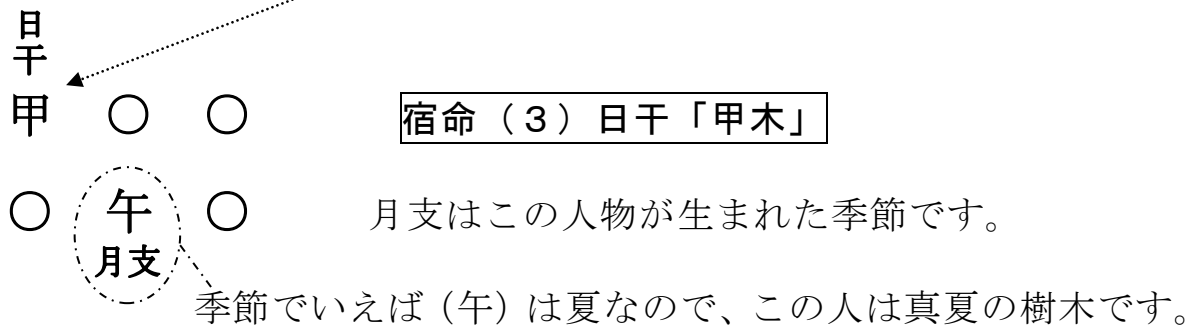
「乙木」はおなじ木性おつのなかでも、小さくて弱くて……
女性的といえは「草」ではないのかと考えまして、

乙 ⇒ 草

乙木を草にたとえるのが、自然界のなかでは当て嵌あはまると考えたわけです。

そこで、「甲」を樹木にたとえて、「乙」を草にたとえて考えてゆくことが多いのです。

〔たとえば〕 宿命を観たときに、日干が「甲」の人物であれば、この人物を樹木にたとえて考えます。



春夏秋冬の季節に当てはめて、この宿命に水が^な無いからどうだとか、金性が多いからどうだとか……というふうにして、「干支」を五行におきかえて、この人物の運勢を観ていくようになります。

余談ですけど……。

乙女 と 乙姫

^{おとめ} 乙女とか^{おとひめ} 乙姫という言葉がありますが、樹木に比べて草のほうが女性的です。という意味があるのです。

それゆえに「乙」は女性的です。という意味合いでつかわれることが多かった言葉なのです。

つぎは、火性にいきます ➡

⇒ 火性

火性は「丙^{へい}」と「丁^{てい}」の陽陰があります。

陽の火性のほうが大きくて強くて、男性的な火性です。

ということで、大きくて強い火性といえ、自然界では太陽が1番です。

丙 ⇒ 太陽

太陽は大きくて、強い火性の代表的な存在です。

それで「丙火」を太陽にたとえて考えます。

それに対して、「丁」は太陽よりも小さくて、弱い火性、女性的な火性だということで、灯火^{ともしび}にたとえます。

「灯」という字は人工的な明かりを意味します。

元々——丁^{ていか}火を灯^{ともしび}にたとえる考え方が算命学にあり、そこから生まれたのが「灯^{あかり}」だそうです。

丁 ⇒ 灯火^{とうか}

具体的には、ろうそくの火、マッチの火、ランプの火、燃えている火はなんでもよいのです。

一つ一つ挙げててもキリがないので、まとめて灯火^{とうか}というふうにととえます。

④ 土性

土性は「戊^ぼ」と「己^き」があります。

戊 ⇒ 山

己 ⇒ 田畑^{たはた}

土性は土^{つち}そのものです。

陽の土は大きい土、強い土で男性的な土、と考えたときに、自然界で大きくて強そうな土、それを〔山〕にたとえると、一番ぴたりと当て嵌まるのではということで、「戊=山」というふうにとれます。

自然界のなかでは、すごく雄大で、大きい存在であり、土で形成される物質といえ、山がその代表でしょう。

それに対して「己」は山よりも小さくて、弱くて女性的な土性ということで、平らな土地であれば、盆地とかもありますし、一つ一つ挙げてみてもキリがないので、田んぼや、畑にするような土地だと想定したしまったほうが、後々の考え方としてわかりやすくなります。

ゆえに「己土」を田んぼや、畑にととえて考えます。

④ 金性

金性は「庚^{こう}」と「辛^{しん}」があります。

庚 ⇒ 斧・刀

辛 ⇒ 宝石

「庚^{こう}金^{きん}」は陽の金性、「辛^{しん}金^{きん}」は陰の金性です。

すでにご存じのように、「甲^{こう}」に五行の木性を付けて「甲木^{こうぼく}」

「庚^{こう}」に五行の金性を付けて「庚金^{こうきん}」

といたり書いたりします。書けば字が異なりますから、木性の甲^{こう}なのか金性の庚^{こう}なのかわかります。しかし、言うときには「こう」といっても、木性の「こう」なのか、金性の「こう」なのかわかりません。

それゆえに、十干に五行を付けて、言葉を発することが圧倒的です。

自然界でいえば、大きい金性ですから、たとえば、大きな岩石^{がんせき}とか、小さい金性は、石ころだというふうにとってもよいのですが……それだと、占う上で、話がわかりにくくなってしまいます。

そこで、もっと身近な金性のなかで、大きくて強くて、

男性的な金性ということで考えると、昔から実際に人間が道具としてつかっていた「斧 おの」とか「刀 かたな」と、いうふうに考えたほうが、話がわかりやすくなります。

それゆえに、庚金は斧や刀にたとえて考えることが多いのです。こうきん 庚金を斧や刀にたとえました。

それに対して――。

しんきん 辛金は斧や刀よりも、小さくて弱くて、女性的な金性だということになります。

小さくて弱くて、女性的な金性といえは〔たとえば〕指輪でもよいですし、ネックレスとか、イヤリングとか、ピアスとかでもよいのです。

それも一つ一つ挙げて言ってもキリがないので、辛金を“宝石類”貴金属にたとえます。

最初から、宝石というふうにたとえて考えることが多いです。

☞ 辛金も刀剣にたとえますが、そのときは、博物館などに展示されている刀です。刀を貴金属とみなします。

④ 水性

水性は「壬^{じん}」と「癸^き」があります。五行の最後です。

壬 ⇒ 海・湖

辛 ⇒ 川・雨

「壬水^{じんすい}」は、大きくて強そうな水です。

これを自然界の物質に当て嵌めると、「海」が一番ピッタリ
くると思います。「湖^{みずうみ}」にたとえることもあります。
すごく大きい湖もありますからね。

それに対して、「癸水^{きすい}」は小さな水ということで、川の水
とか、雨の水というふうにととえることが多いです。

このように、「十干」を物質にととえて表します。

〔たとえば〕己^きは土性です。もし日干が「己土」だという
人物がいた場合に、この「己土」を田畑にととえます。
そして、季節を加えますと、夏の畑とか、冬の畑とかに
なるわけです。

そのときに、夏の畑と冬の畑では、耕す方法も、作物を
育てる方法も違ってくるはずですよ。

日干		年干		宿命(4) 日干「己土」
己	○	水		
水	子	○		月支はこの人が生まれた季節をみます。
日支	月支			季節でいえば(子)は真冬なので、この人は真冬の畑です。

この宿命は水が多いので、畑は凍ってしまふ。

季節が冬で、日干が己土だとすれば、宿命に水が多いと、畑そのものが凍ってしまいます。

日干	月干	年干		宿命(5) 日干「己土」
己	辛	乙	乙木を作物とすれば、太陽がければ育たない。
○	未	水		
	月支			月干の辛金を石ころとすれば、石ころ混在の夏の畑です。
	夏			

季節は夏です。日干「己土」で、年干に「乙木=作物」があります。畑の役目は作物を育てることです。水はありますが、太陽がない、となると、作物は育ちません。お米は夏の日照がなければ結実しません。冷害です。

このような状況で、宿命の運勢を良くするには、どうしたら良いのかを考えるわけです。

もうお解りと思いますが、宿命を語るには「日干」だけ

では、語るができないのです。

月支に十二支があれば、季節は語れますが、それだけでは運勢を語ることはできません。陰占は運勢を観ます。

陰占は「年干支」「月干支」「日干支」という6つの干支があります。日干「己土」はそのなかの1つにすぎません。とはいっても「日干」は自分自身ですから、日干が中心です。

日干が無ければ、宿命を語ることは当然できません。

あるいは、日干が「戊土」の人なら、おなじ山であっても、春の山と、秋の山とでは、山の姿は異なります。

当然、そこで起こる現象も違ってくるはずです。

そういったもろもろの事象を^{もとい}基にして、その人の運勢がどうか、性格はどうだとか……それらの事柄を観てゆくようになります。

「^{じっかん}十干」を“もの”にたとえてきました。このように物質にたとえるのは、十干の基本だと思っておいってください。いずれ……陰占の勉強に入っていくと、これらを具体的につかって、詳しい観方をしてゆくようになります。

そのときには、「十干」を“もの”にたとえる考え方が、
たびたび度々出てきますので、十干はこのようにして、“もの”に
たとえる。ということを、現在の段階では、ご理解して
おいて頂ければよろしいです。

⇒ 「甲」「乙」について、どのような考え方をしているのか、少し
だけお話しします。

このような考え方をしますよ——ということでご説明します。

まずは「甲木」の考え方として大切なのは、樹木の成長
にとって、水性と火性は、欠かすことの出来ないものだ
ということです。

その人物の日干が「甲」であれば、その人物を「甲木」
つまり樹木にたとえて占います。

樹木が成長するためには、不可欠な要素があります。

「宿命に水性と火性が無いということは、甲木（樹木）は
ダメになります」ということです。

樹木は、水や太陽がなければ育たないという意味です。

そして『水が多すぎても、根っこが腐って、自立できな
い人になります』という考え方もするのです。

あるいは、樹木の“^{えだばら}枝払い”が必要な時期に、^{えだう}枝打ちをしないと、立派な大木にはなれませんから、枝を切ってくれる金性（ものに例えて^{のこぎり}鋸・^{おの}斧）が無ければ、自分勝手な人になってしまいますよ。とか、さまざまに想定することができます。

「甲木」は、独立・忍耐・頑固の質をそなえています。これはおなじ五行木性であっても、「乙木＝草」とは違う甲木がもつ本来の特徴です。樹木は真夏の厳しいときも、冬の雪のなかでも、じっと我慢して、そこに根を張って^{しょうりつ}聳立います。そうしますと、この状態を“人間が仕事としている姿”と考えるならば〔転々として、職を変える〕のは向いてない。ということになるのです。（^{いま}現在わからなくても、このような考え方をしていくのかな——と、ご理解して頂ければ結構です。必ずわかるようになります。

甲木の姿とは対比的に、「乙木」には協調・協和の質があり、その質を発揮して集団行動をする特徴があります。ほとんどの草は、たった1本で生え続けるということは

ないはずですが。すぐにドントドントドント増えていきます。

乙木は何度挫折しても、へこたれないで立ち上がる頑固さをもっています。それは見事なものです。

草は、踏まれても、倒されても、あるいはコンクリートの割れ目からでも生えてきます。

この姿を人間にたとえれば、「乙木の人、何度挫折しても、立ち上がって生きて行く」という、しなやかな強さを発揮して人生を歩み進むのが「乙木」本来の生き方ということになります。

陰占の十干・十二支の勉強に入ってから、詳しい観方を勉強していきますので、^{いま}現在はこのような考え方をするのか……ということを、理解なさって頂ければよろしいと思います。

必ず、深く理解できるようになります。

【初年】 19回目【十干天性】 **終わります**

つぎの授業 ⇒ 【初年】 20回目【^{かんし}干支】 ⇒ 『^{そうしょう}相生』 『^{そうこく}相剋』 『^{ひわ}比和』